ティーチング・ステートメント

所属　全学共通教育部
名前　郡谷　寿英
更新日　2024.2.26

【責任】

全学共通教育部に所属し，「プロジェクトスキルⅠ・Ⅱ」の科目を担当している（シラバス参照。担当科目は2024年度以降順次「課題発見解決法Ⅰ・Ⅱ」に移行。）。また，社会教育・生涯学習に関連する領域について，心理学的手法を用いた研究活動を行っている。

【理念】

「プロジェクトスキルⅠ・Ⅱ（課題発見解決法Ⅰ・Ⅱ）」の授業では，学生に対して大学生活及び大学卒業後の社会に適応・活動するための基礎的な力としてのメタ認知能力を身につけることを目指す。

その理由として現代は，人生100年時代や科学技術の進展が目覚ましい社会（Society5.0）を迎える等，変化の激しい常に新しい未知の課題に試行錯誤しながらも対応することが求められる社会（知識基盤社会）と言われていることを挙げることが出来る。

今後社会活動に求められるのは，職業の専門性とともに，仕事や日常生活における様々な課題に対して，自身が身につけた知識や技術を総合的に活用する姿勢や能力（例えば，社会人基礎力）であり，企業が求める人材も同様である。また，社会活動の多くは集団（チーム）によって行われるため，協調性や発信力さらにはリーダーシップなども求められる。これらの能力は，メタ認知能力すなわち自分自身を客観的に把握し，制御する力を高めることによって培われることが認知心理学や認知科学の研究領域などで言及されている。

そこで，メタ認知能力の向上を通じて，絶対的な正解のない問い（未知の課題）に対する気付きや，興味関心，積極性，主体性，さらにチームで取り組むための課題発見・解決型能力を育みたい。

【方針・方法】

上記の理念を実現するために，担当科目「プロジェクトスキルⅠ・Ⅱ」では，卒業後の社会活動を念頭に置きながら，以下の方針に沿った方法を実施している。なお，授業実施に当たっては，学生の主体的な活動となるよう，事象に対する教授は必要最小限に留め，活動の発展や改善が必要な場合等の助言を個別に行うことに主眼を置く。

方針１及び方法：「メタ認知的知識の育成」

「メタ認知的知識」とは，自分の長所や短所など「自分自身について知っている知識」を指す。方針１では課題解決の活動を通して，自分の強みや弱みあるいは興味関心といった自身の特性や課題を明確化できるようにする。その方法として，グループワークを中心に様々なメンバーと交流することとする。また，扱う教材はゲーム性のあるプラクティスから社会的課題へと段階的に難易度を高めていく。その際，学生自身がチームでの活動において，協調性，主体性，積極性など客観的に自身を見つめるため，毎回「社会人基礎力」の3つの能力，12の能力要素からなる「振り返りシート」を作成させ，ふり返りの機会を設定している（プロジェクトスキルⅠ（課題発見解決法Ⅰ）の前半は別のリフレクションペーパーを用意する）。

方針２及び方法：「メタ認知的技能（メタ認知的モニタリング）の育成」

「メタ認知的技能」とは，メタ認知的知識を把握した上で，現在の自分自身がどうであるか確認したり，対策を講じたりする能力を指す。方針２では授業でのグループワークを通じ

て得た自身のテーマにおける理解度や方針１で得た活動の傾向から，自身の強みや弱みを踏まえ自己認識させる（メタ認知的モニタリング）。その方法として，毎授業時の「振り返りシート」によるふり返りとともに，レポート作成及びそれらのフィードバックを実施する。

方針３及び方法：「メタ認知的技能（メタ認知的コントロール）の育成」

方針３では，メタ認知的モニタリングで確認できたことを踏まえて感情をコントロールしたり，改善に向けて行動変容のために工夫ができたりするようにする。その方法として，様々なメンバーとの交流により，課題解決のための多様な意見に触れつつ，単なる多数決による決議ではなく合意形成（consensus building）を実践できるようにする。また，いくつかのテーマについて，レポートの他にプレゼンテーションを実施し，その時のグループにおける役割や責任を認識できるようにする。そのため作業の進捗状況や学生個人の活動状況を確認できるようなワークシート等を定期的に提出するようにしている。

その他方法

上記方法の他，学生が主体性を持って授業に臨めるように，テーマ選択の工夫とともに活動や発言がしやすいような環境作りや学生同士によるプレゼンテーション評価を実施する。また，興味関心を高めるための外部講師の招聘や ICT 利活用あるいは学生の声を聞く等の工夫するように取り組んでいる。

【成果・評価】

・授業全般についての学生の評価：授業アンケートでは特に，学生間での議論の場があること，授業で取り上げる内容，について高い評価が得られた。
・プレゼンテーション発表：資料の完成度や発表姿勢について学生間の評価も実施することにより，授業の後半では前半より洗練度の高い発表を学生が行うようになった。
・学生による各種提出物：授業毎に実施するリアクションペーパーやレポートでは，自身の学びや課題，疑問について段階を追って気づきの改善・高度化とともに，取り組んだ社会的課題について，学生自身の経験と結びつけながら考察できるようになった。

【目標】

短期目標

・学生が能動的に授業に取り組めるよう，教材開発等，授業内容の見直しを図る（1-2 年）。
・学生が常に社会の動向に自分なりの興味関心を持てるようにするため，新聞等マスメディアを積極的に用いる（1-2 年）
・学生が常に社会の動向に自分なりの興味関心を持てるようにするため，道内企業との連携を構築する（1 年毎）。

長期目標

・学生が卒業後の社会活動をイメージ出来るような授業を構築する。
・学生が多角的な視点を踏まえながら合意形成等が身につくようにする。
・本学の課題解決型学習の充実を図るため，他大学等の先進事例を調査・研究し効果的な教育の在り方を模索する。